

命を救うには、医療だけでなく、人や社会とのつながりが大切——京都大学医学部2年生のとき、異なる分野の人と一緒にヘルスケアの課題解決を考える学生団体「inochi学生プロジェクト」に参加した。活動を続けるなかで、万博誘致の動きを知った。テーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」。専門性や国籍を超え、世界中の人がヘルスケアや生命について考えることに魅力を感じ、未来を担う若い世代の万博誘致チーム「WAKAZO」のメンバーとして活動を始めた。

当初、1970年万博を知るシニア世代の強い熱意に比べ、若い世代がどこまで共感してくれるか気がかりだったが、杞憂だった。アイデアコンテストをすれば、多様な分野の若者から「こんなことをしたい」という声が続々集まってきた。活躍できる場があれば、心に秘めたエネルギーに火がつく。いい驚きだった。

昨年6月、開催地決定のカギを握る、BIE総会のプレゼンテーションでオープニングスピーチを務めた。伝えたのは、ヘルスケア分野における関西の可能性だ。京都・大阪・神戸、各地に最先端の研究機関があり、研究結果を社会に還元しようという風土がある。同じスピーチの場に立たれたノーベル賞学者・山中伸弥先生のように偉大な先輩も大勢いる。みなさんが築いてこられたものを、私たちが確実に引き継いでいきたいと訴えた。

開催が決定した今、新たな挑戦課題の一つはパビリオン「WAKAZO館」の実現だ。開催まであと6年。世界中の若者と、いのちとは何か議論し続け、その集大成を夢洲の万博会場から発信したい。とはいえ、万博は通過点。もっと恒久的な拠点として、世界中の若者がつながり、課題解決に向けて挑戦できるプラットフォームを中之島につくり、活動を継続していきたい。2025年以降も、関西が世界の若者が集まる魅力的な街になるように。

ヘルスケアという切り口から、人類のよりよい明日へ貢献すること。万博のテーマは、私自身の夢とも重なる。2025年、私は30歳。精神科医をめざしているが、その頃には自分も医療分野をリードしていく存在になれるよう、成長していきたい。

世界の若者と「いのち」を考える

川竹絢子 「WAKAZO」執行代表・京都大学医学部生



「WAKAZO館」パビリオン案の一つ
「物質創造実験」模型

Ayako Kawatake

かわたけ あやこ
1995年愛知県生まれ。2016年京都大学医学部3年生のとき、「2025大阪万博誘致 若者100の提言書」編集委員を務める。2017年より、若者が主体となって大阪・関西万博を創り上げるチーム「WAKAZO」として誘致活動に携わる。2018年6月、BIE総会の第3回プレゼンテーションでオープニングスピーチを務め、誘致決定に貢献した。現在の目標は若者によるパビリオン「WAKAZO館」の実装。2019年4月から6年生、精神科医をめざしながら活動が続いている。
<https://wakazo-expo.com/>

季刊 [やく] March 2019 | No. 38

C O N T E N T S

02 Person 人・明日をつくる

世界の若者と「いのち」を考える
川竹絢子

03 [鼎談] 基軸を探る

経済成長とエネルギーを考える

山地憲治／大橋 弘／近藤寛子

18 オビニオン

エネルギー政策への視点

エネルギーミックス

「供給側での総力戦に加え需要側のリソース活用を」岩船由美子

経済基盤

「経済再生へ、基盤としての電気をどうする?」山本隆三

原子力

「深化する安全——40年以降の運転を支える高経年化対策」関村直人

25 旬発 NIPPON

京都府域の観光客拡大へ
「もうひとつの京都」プロジェクト

29 かんてん FOCUS

パイオニアとしての矜持で

原子力の「40年以降運転」に挑む

吉田裕彦

34 現場力ノ最前線

高浜1・2号機の運転期間延長を支える